

指導要録—学年末「関心・意欲・態度」をどう評価しますか？（204号 1993.2）

今回の「視点論点とてん」を書くにあたって、編集部員の勤務校及び教委の状況を調べてみた。それによると、各教委の姿勢はほぼ同様（文部省の意向通り）で、それが管理職を通じて何らかの形で伝達されている。だが、それだけでは実際の運用上非常に不十分で具体性にかける。にもかかわらず、1月末現在でも、職員会議等で突っ込んだ議論がなされていない所が多いようである。ただ、あゆみ（通信簿）作成時に一定の議論がなされたようで、大阪市内のある学校のように、その時点で、すでにあゆみ自体が要録（教委案）の形式を踏襲したものに作りかえられているところもあった。そういったところでは、今後も、議論のないまま、年度末に突入すると予想される。また、多少の議論がなされるころでも、本来要録での評価・評定になじまない「関心・意欲・態度」のことであるため、十分な納得がいかないまま、大きな圧力を感じながら、職場・個人レベルの対応に委ねられることになる。

つまり、評価・評定をめぐる本質論議・具体論議共に不十分なまま、いわば「なし崩し」的に、改訂初年度の要録が付けられ、来年度以降もそれほど論議されることもなく現場に「定着」していくという、権力側の術中に見事にはまっていきそうな状況なのである。ただ、その場合においても、各学校のこれまでの経過、組合との考え方や、力関係、各教委や管理職の微妙な対応の違い（「オールBはダメだが、必ずしもCを付けなければならぬわけではない」と言った表現ところもある。）などによって、多少の幅が出るのが予想される。現に部員の勤務校の対応予想でも、「『関心・意欲・態度』項目は、従来通りつけない方向で」「オールAでつける」「CはつけずABでつける」「何らかの判断資料を持ってつける」と様々なのである。

「関心・意欲・態度」をどう考えるか

今回の「関心・意欲・態度」重視のねらいは、「落ちこぼし（早期からの選別）」をしつつ、その批判かわしのため、要録で「落ちこぼしを感じさせない」ことにあると言えよう。それはこれまでの教育を「知識偏重」と批判することによって。「複線的に多様化された学校制度をつくり出す」ためであり、それまでの一元的能力主義から多元的能力主義への学習観の変換と見てよいと思われる。（『生活指導』2月号、竹内論文参照）

これに対し、子どもの権利条約に基づく、新しい学習観をわれわれがどのように創造していくかがこれからの課題となる。そこでは、最近の同志会の研究動向にも見られるように、価値（観）や、意欲・関心なども当然重視される。

では、要録の「関心・意欲・態度」とどこが違うのかということであるが、要録の「関心・意欲・態度」は、それだけで独立して（知識理解の裏付けなしでも）教えられようとしている。さらに、そうであるが故に、一方で制度知を詰めこみながら、社会の変化に適応（順応）していくための「関心・意欲・態度」に矮小化されていく傾向持つことになる。一方我々の求める「価値（観）・意欲・関心」等は、知識・理解等の上に、或いはその獲得過程の中で形成されていくものとする。その方向は、子どもの生活現実と権利性に根差しつつ、現実変革を目指すものである。従って、その時々の「価値・意欲・関心」の評価は、まさに教師による教育活動への評価として示されるのであって、子どもに対する評価とはならないものであると考えるのである。

以上の様な観点に立った要録論議を、今、意図的に校内で盛り上げてことが、権力側の術中にはまらないためにも、また、自己の良心と闘いながら要録に向かう場合にも必要なのではないだろうか。